

第4章 火災による死傷者の状況

1 火災による死者

○ 火災による死者は、たばこ、暖房器具、厨房機器の順に多く発生しています。

(1) 発生状況

ここでとりあげる「火災による死者」とは、火災に起因して死亡した者をいい、「自損行為」とは、放火による自損行為のことをいいます。

ア 発生状況

火災による死者の年別発生状況は表 4-1-1 のとおりです。

平成 26 年中の死者発生状況をみると、全火災件数の 1.8%にあたる 87 件の火災で 94 人が死亡しており、前年と比べて死者の発生した火災件数、死者数ともに増加しています。

表 4-1-1 年別発生状況（最近 10 年間）

年 別	全 火 災 件 数	火 災 の 発 生 し た 数	死 者 数 合 計	死 自 損 行 為 以 外 の 数	年 齢 区 分					
					(乳 5 歳 以下) 児	(6 未 19 歳) 年	(成 20 64 歳) 人	(前 65 74 歳 期 高 齢 者	(後 75 歳 期 高 齢 者 以上	不 明
17	6,373	129	137(27)	110	2(-)	3(2)	62(19)	28(4)	41(1)	1(1)
18	5,912	108	116(30)	86	3(-)	-(-)	53(22)	26(5)	33(2)	1(1)
19	5,796	132	149(35)	114	2(-)	3(-)	75(27)	28(5)	40(2)	1(1)
20	5,762	120	128(27)	101	2(-)	1(-)	54(18)	21(5)	50(4)	-(-)
21	5,598	118	129(31)	98	1(-)	4(-)	65(22)	16(6)	42(2)	1(1)
22	5,086	93	105(16)	89	2(-)	6(-)	39(10)	25(2)	31(2)	2(2)
23	5,340	78	84(14)	70	-(-)	1(-)	37(10)	12(2)	34(2)	-(-)
24	5,088	103	115(21)	94	3(-)	2(1)	44(15)	23(4)	42(1)	1(-)
25	5,190	80	87(10)	77	-(-)	1(-)	30(7)	16(2)	40(1)	-(-)
26	4,804	87	94(16)	78	-(-)	-(-)	21(7)	25(8)	47(-)	1(1)

注 1 火災件数は、治外法権火災及び管外からの延焼火災を除いています。

2 () は「自損行為による死者」数を内数で示したものです。

年齢区分別と火災種別、男女別の死者発生状況は、表 4-1-2 のとおりです。

男女別発生状況をみると、男性が 54 人（57.4%）、女性が 40 人（42.6%）となっており、男性が 6 割近くを占めています。自損行為による死者を除いて年齢区分別にみると、男女ともに 75 歳以上の高齢者（以下「後期高齢者」という。）の比率が高くなっています。

表 4-1-2 年齢区分と火災種別、男女別死者発生状況

死者の年齢区分		火 災 種 別									男 女 別	
		合 計	建 物 火 災					車 両	船 舶	そ の 他	男 性	女 性
			小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や					
火 災 件 数		87	76	24	12	29	11	3	1	7	性	性
死 者 数	合 計	94	82	27	15	29	11	4	1	7	54	40
	自 損 行 為 以 外	78	76	27	14	26	9	1	1	－	43	35
	乳 幼 児（5 歳 以 下）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	未 成 年（6 ～ 19 歳）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	成 人（20 ～ 64 歳）	14	13	3	4	5	1	－	1	－	12	2
	前期高齢者（65～74 歳）	17	16	5	4	5	2	1	－	－	12	5
	後期高齢者（75 歳以上）	47	47	19	6	16	6	－	－	－	19	28
	不 明	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
自 損 行 為 に よ る 死 者		16	6	－	1	3	2	3	－	7	11	5

イ 自損行為による死者

「自損行為による死者」16 人の発生状況について男女別をみると、男性が 11 人（68.8%）、女性が 5 人（31.3%）となっており、男性が 7 割近くを占めています。

年齢別では 65～74 歳の高齢者（以下「前期高齢者」という。）が 8 人（50.0%）、「成人」が 7 人（43.8%）、「不明」が 1 人（6.3%）となっています。

自損行為による死者を火災種別ごとにみると、建物火災での死者が 6 人（37.5%）、建物以外の火災で 10 人（62.5%）となっています。建物火災での死者 6 人のうち 4 人は住宅や共同住宅の自宅で灯油等をかぶり、自らライター等で火をつけて自損を図っています。建物火災以外では、敷地内や河川敷において灯油等をかぶり自損を図ったものです。

以下、「自損行為による死者」16 人を除いた 78 人について分析します。

ウ 年齢別発生状況

年齢区分別に死者の発生状況をみると、高齢者の死者は 64 人（82.1%）で、自損行為を除く死者数の 8 割以上を占めています。

エ 火災種別・程度別発生状況

火災種別ごとの死者発生状況をみると、78 人のうち建物火災で 76 人（97.4%）、建物以外で 2 人（2.6%）発生しています。建物火災による死者のうち、部分焼以上に延焼拡大した火災（以下「延焼火災」という。）による死者は 67 人（88.2%）発生しています。

オ 月別火災件数と死者発生状況

月別の火災件数と、自損行為を除いた死者の発生状況を表したのが表 4-1-3 です。

1 月から 3 月及び 12 月は火災の多発する時期で、この期間の火災件数は 1,736 件（36.1%）で、死者数は 47 人（60.3%）となっており 6 割以上を占めています。

また、3 月から 6 月、8 月、10 月及び 11 月は月中の死者全てが高齢者であり、1 月と 2 月の死者も 8 割以上が高齢者となっており、全体的に高齢者の割合が高い結果となっています。

表 4-1-3 月別火災件数と死者発生状況

項 目		月 合計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
火 災 件 数		4,804	522	361	445	446	428	318	346	365	428	368	369	408
死 者 数	合 計	78	13	9	12	4	8	1	2	3	5	2	6	13
	高齢者 以 外	14	2	1	-	-	-	-	1	-	5	-	-	5
	高齢者	64	11	8	12	4	8	1	1	3	-	2	6	8
高齢者の占 める 割 合 (%)		82.1	84.6	88.9	100.0	100.0	100.0	100.0	50.0	100.0	-	100.0	100.0	61.5

注 1 火災件数は、治外法権火災を除いています。

2 死者数は、自損行為による死者を除いています。

カ 時間別発生状況

時間別で死者の発生状況をみると、死者が発生した火災の出火時間帯で最も多いのは、23 時台で 12 人（15.4%）発生しています。そのうち 11 人（91.7%）は高齢者でした。

(2) 出火原因別発生状況

発火源別の経過・火災種別死者発生状況についてみたものが表 4-1-4 で、年齢区分と発火源別にみたものが表 4-1-5 です。

表 4-1-4 発火源別の経過・火災種別死者発生状況

発火源		合 計	経過								火災種別						
			火 源 が 落 下 す る	電 線 が 短 絡 す る	可 燃 物 が 接 触 す る	不 適 当 な 処 に 捨 て る	接 炎 す る	放 射 を 受 け て 発 火 す る	そ の 他	不 明	建物					車 両	船 舶
											小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や		
合計		78	18	10	7	4	4	2	12	21	76	27	14	26	9	1	1
たばこ		21	17	-	-	4	-	-	-	-	21	2	5	12	2	-	-
季節 関連 器具	小計	10	-	2	4	-	1	2	-	1	10	3	-	4	3	-	-
	電気ストーブ	6	-	-	4	-	-	1	-	1	6	2	-	2	2	-	-
	電気あんか	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
	ハロゲンヒータ	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-
	石油ストーブ	1	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-
	電気毛布	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
厨房 関連 連	小計	6	-	1	3	-	2	-	-	-	6	1	-	3	2	-	-
	ガステーブル	4	-	-	2	-	2	-	-	-	4	-	-	3	1	-	-
	ガスレンジ	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
	電気冷蔵庫	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
コード		5	-	5	-	-	-	-	-	-	5	2	2	1	-	-	-
差込みプラグ		3	-	-	-	-	-	-	3	-	3	3	-	-	-	-	-
ライター		2	-	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-	1	1	-	-
コードコネクタ		2	-	2	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-
その他		7	1	-	-	-	-	-	5	1	5	3	1	-	1	1	1
不明		22	-	-	-	-	-	-	3	19	22	13	4	5	-	-	-

注 自損行為による死者を除いています。

表 4-1-5 年齢区分と発火源別死者発生状況

年 齢 区 分	合 計	発 火 源														
		たばこ	季節関連器具					厨房関連				コード	差し込みプラグ	ライター	コードコネクタ	その他の
			小計	電気ストーブ	電気あんか	ハロゲンヒーター	石油ストーブ	電気毛布	小計	ガステーブル	ガスレンジ	電気冷蔵庫				
合 計	78	21	10	6	1	1	1	1	6	4	1	1	5	3	2	7
乳 幼 児 (5 歳以下)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
未 成 年 (6～19 歳)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
成 人 (20～64 歳)	14	6	1	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	5
前 期 高 齢 者 (65～74 歳)	17	7	-	-	-	-	-	-	2	-	1	1	-	-	1	4
後 期 高 齢 者 (75 歳以上)	47	8	9	5	1	1	1	1	3	3	-	-	5	3	2	13

注 自損行為による死者を除いています。

ア たばこ

たばこによる火災の死者は 21 人（26.9%）で、前年と比べて 1 人減少しています。

年齢別では「後期高齢者」が 8 人（38.1%）、「前期高齢者」が 7 人（33.3%）、「成人」が 6 人（28.6%）となっています。

経過をみると、「火源が落下する」が 17 人（81.0%）と 8 割以上を占めています。

「火源が落下する」のうち、「寝たばこ」によるものが 6 人（35.3%）発生しています。

たばこが出火原因である場合、概ね無炎燃焼を継続してから有炎となり燃え上がるため、火種の落下直後は気付かない場合が多いと考えられます。

事例 たばこにより出火し 2 人が死亡した火災（1 月・足立区）			
構造・用途等	防火造 3/0 住宅	出火階・箇所	1 階・居室
焼 損 程 度	建物半焼 1 棟 35m ² 等焼損 死者 2 人		
この火災は、火元者（70 歳代男性）が喫煙後、たばこの火種が布団等に落下し着火し、出火したものです。火元者は火種が落下したことに気が付かず就寝したため、発見が遅れ、火元者と火元者の妻（70 歳代女性）が死亡しています。			

イ 季節関連器具（暖房器具）

季節関連器具による火災の死者は、前年同数の10人（12.8%）発生しており、このうち「電気ストーブ」が6人（60.0%）で季節関連器具の6割を占めています。

季節関連器具による火災の経過をみると、ストーブに衣類や紙製品等の可燃物が接触したり、放射熱により発火したものが6人（60.0%）などとなっています。

ウ 厨房関連器具

厨房関連器具による火災の死者は、前年と比べて3人減少の6人（7.7%）発生しており、このうち「ガステーブル」が4人（66.7%）、「ガスレンジ」及び「電気冷蔵庫」が各1人（16.7%）となっています。

厨房関連器具による火災の経過をみると、「可燃物が接触する」が3人（50.0%）、「接炎する」が2人（33.3%）などとなっています。

エ その他

「コード」による火災の死者が5人（6.4%）、「差込みプラグ」による火災の死者が3人（3.8%）などとなっています。

2 火災による負傷者

○ 初期消火中の受傷による負傷者が最も多く発生しています。

(1) 発生状況

ここでとりあげる「火災による負傷者」とは、火災に起因して負傷した人をいいます。

ア 発生状況

火災による負傷者の年別発生状況は表 4-2-1 に示すとおりです。

表 4-2-1 年別発生状況（最近 10 年間）

年 別	合 計	負 傷 者 区 分			
		一 般 人			消防活動従事者
		小 計	自 損 行 為 以 外	自 損 行 為	
17	1, 243 (11)	1, 220 (11)	1, 191 (10)	29 (1)	23
18	1, 234 (12)	1, 211 (12)	1, 195 (12)	16 (－)	23
19	1, 230 (12)	1, 207 (12)	1, 191 (8)	16 (4)	23
20	1, 187 (8)	1, 162 (8)	1, 141 (8)	21 (－)	25
21	1, 025 (9)	1, 003 (9)	983 (8)	20 (1)	22
22	932 (9)	913 (9)	897 (7)	16 (2)	19
23	962 (13)	944 (13)	918 (11)	26 (2)	18
24	832 (7)	814 (7)	802 (7)	12 (－)	18
25	781 (3)	763 (3)	744 (3)	19 (－)	18
26	790 (8)	777 (8)	761 (7)	16 (1)	13

注 1 消防活動従事者とは、消防職員、消防団員などの消防活動等に従事した者の区分です。

2 ()内は、30 日死者(火災による負傷者のうちで、48 時間を超え 30 日以内に死亡した人)を内数で示したものです(「30 日死者」の項を参照)。

平成 26 年中に、負傷者が発生した火災は 579 件で、790 人が負傷しており、前年と比べて負傷者の発生した火災件数は 29 件減少しましたが、負傷者は 9 人増加しています。このうち一般人の負傷者は 777 人(98.4%)で前年と比べて 14 人増加し、消防活動従事者(消防職員・消防団員などの消防活動等に従事した者)が 13 人(1.6%)で、5 人減少しています。

また、負傷者の発生率(負傷者の発生した火災が、総火災件数に占める割合)は 12.1%で、前年と比べて 0.4 ポイント増加しています。

3 人以上の負傷者が発生した火災は 43 件で、178 人が負傷しており、前年と比べて、火災

件数は13件、負傷者が74人それぞれ増加しています。これらの火災では、住宅や共同住宅から出火し、避難の際に廊下や階段などで煙を吸って負傷するケースや、初期消火の際に負傷するケース、更に就寝中で発見が遅れ、煙を吸うなどして負傷するケースが多くみられます。なお、ここからは火災による負傷者のうち、消防活動従事者（13人）及び自損行為による負傷者（16人）を除いた761人について分析します。

イ 火災種別・年齢区分と受傷程度の状況

火災種別と年齢区分別に受傷程度をみたのが表4-2-2です。

火災種別ごとに負傷者の発生数をみると、建物火災での負傷者は708人（93.0%）と大部分を占めています。さらに建物火災を火災程度別でみると、部分焼以上の延焼火災では354人（50.0%）発生し、建物火災の5割を占めています。

受傷程度別でみると、「軽症」が443人（58.2%）で最も多く、負傷者の6割近くを占めています。

火災による負傷者を、「高齢者」と「高齢者以外」でみると、「高齢者以外（不明を含む。）」は514人（67.5%）で、「高齢者」は247人（32.5%）となっており、「高齢者」の割合は前年と比べて4.5ポイント増加しています。

表 4-2-2 火災種別・年齢区分別受傷状況

受 傷 程 度	合 計	火 災 種 別								年 齢 区 分				
		建 物					車	船	そ の 他	（乳 5 歳 以下） 児	（未 6 ヶ 月 19 歳） 年	（成 20 ヶ 64 歳） 人	（前 65 期 74 歳 高 齢 者）	（後 75 期 高 齢 者）
		小 計	全 焼	半 焼	部 分 焼	ぼ や								
合 計	761	708	63	52	239	354	16	1	36	11	39	464	124	123
重 篤	23	22	3	1	8	10	－	1	－	－	1	14	4	4
重 症	94	89	7	11	38	33	4	－	1	－	1	58	15	20
中 等 症	201	192	9	12	70	101	1	－	8	3	9	114	35	40
軽 症	443	405	44	28	123	210	11	－	27	8	28	278	70	59

注 消防活動従事者及び自損行為による負傷者を除いています。

事例 1 多数の負傷者が発生した火災（1 月・立川市）			
構 造 ・ 用 途 等	耐火造 5/0 共同住宅	出火階・箇所	2 階・ダイニングキッチン
焼 損 程 度	建物部分焼 1 棟 49 m ² 等焼損 負傷者 10 人		
この火災は、共同住宅 2 階ダイニングキッチン内で、火元者（60 歳代男性）が使用していた電気ストーブのヒータ部に衣類が落下したため、出火したものです。			
この火災により、火元者の他に建物居住者 9 人が避難しようとした際に煙を吸い負傷しています。火元者は全身に火傷を負い、二日後に死亡しています。（30 日死者）			

(2) 出火原因別発生状況

ア 出火原因別受傷時の状態

出火原因別及び負傷者の男女別で受傷時の状態をみたのが、表 4-2-3 です。

出火原因別にみると、「ガステーブル等」が 159 人（20.9％）で最も多く、次いで「たばこ」が 98 人（12.9％）、「放火」が 53 人（7.0％）などとなっています。

また、これら出火原因ごとの火災 1 件あたりの負傷者発生率は、それぞれ「ガステーブル等」が 38.2％（火災件数 416 件）、「たばこ」が 13.8％（火災件数 710 件）、「放火」が 3.8％（火災件数 1,381 件）となっています。

受傷時の状態別でみると、「ガステーブル等」では「家事従事中」に受傷したものが 60 人（37.7％）で最も多く、次いで「初期消火中」は 44 人（27.7％）などとなっています。

「たばこ」では「初期消火中」が最も多く 31 人（31.6％）で、次いで「就寝中」が 20 人（20.4％）などとなっています。

「放火」では「初期消火中」が 17 人（32.1％）、次いで「就寝中」が 10 人（18.9％）などとなっています。

表 4-2-3 出火原因別受傷時の状態

受 傷 時 の 状 態	合 計	主 な 出 火 原 因													男 女 別	
		ガ ス テ ー ブ ル 等	た ば こ	放 火	電 気 ス ト ー ブ	大 型 ガ ス こ ん ろ	ラ イ タ ー	ロ ウ ソ ク	コ ド	石 油 ス ト ー ブ 等	屋 内 線	た き 火	大 型 ガ ス レ ン ジ	そ の 他	男 性	女 性
合 計	761	159	98	53	49	39	33	21	21	18	7	6	6	251	445	316
初 期 消 火 中	208	44	31	17	16	14	4	4	1	2	－	4	1	70	144	64
作 業 中	114	19	－	2	2	15	9	6	1	4	3	2	2	49	79	35
家 事 従 事 中	91	60	2	2	1	－	2	5	2	1	－	－	－	16	26	65
避 難 中	77	4	19	4	5	1	4	2	3	1	－	－	2	32	38	39
就 寝 中	75	6	20	10	11	3	－	1	3	－	1	－	－	20	50	25
休 憩 中	52	6	6	5	3	1	7	1	1	4	2	－	1	15	31	21
飲 食 中	15	5	3	1	－	1	－	1	－	1	－	－	－	3	7	8
その他・不明	129	15	17	12	11	4	7	1	10	5	1	－	－	46	70	59

注 消防活動従事者及び自損行為による負傷者を除いています。

男女別では、男性が 445 人（58.5%）、女性が 316 人（41.5%）と男性の受傷割合が高くなっています。

受傷時の状態を男女別でみると、男性が「初期消火中」、女性が「家事従事中」の受傷割合が最も高くなっています。次いで男性は「作業中」、「就寝中」の受傷割合が多く、女性は「初期消火中」、「避難中」の受傷割合が多くなっています。

イ 受傷時の状態と受傷の理由

受傷の理由で多いものとしては、「火に接近しすぎた」が 123 人（16.2%）、「自ら消火する能力がなかった」が 103 人（13.5%）、「消火に手間取った」が 102 人（13.4%）などとなっています。

主な事例としては、初期消火中に燃焼物に接近しすぎて火炎にあおられる事例や、タオルや座布団を被せたり、油に水をかけるなどしたために受傷する事例などがあります。これらは、火災を比較的早期に発見し、初期消火をしているにもかかわらず、その手段や方法が適切でなかったために受傷してしまった事例です。

「自ら消火する能力がなかった」ものは、出火時に家事従事中（調理中等）で着衣着火などにより受傷したものです。

事例 2 初期消火中に負傷した火災（12 月・新宿区）			
構造・用途等	耐火造 11/0 共同住宅	出火階・箇所	3 階・居室
焼 損 程 度	建物ぼや 敷布団 1 枚等焼損 負傷者 2 人		
この火災は、火元者（90 歳代男性）がたばこを吸った際に布団に火種が落ちたことに気が付かなかったため、無炎燃焼を継続して出火したものです。火元者は足元の熱さで目が覚めたところ、足元の布団から炎が上っているのを発見しました。			
共同住宅の共有部分には消火器が設置されていましたが使用せず、布団を被せたり水道水をボウルにくみ、かけるなどして初期消火を行いました。初期消火の際に火元者とその妻（90 歳代）が受傷しました。			

(3) 30 日死者

「30 日死者」とは、火災による負傷者のうちで、48 時間を超えて 30 日以内に死亡した人のことをいいます。平成 26 年中は、自損行為によるもの 1 件 1 名を除いて、7 件の火災で 7 人が亡くなっており、前年と比べて 4 人増加しています。

30 日死者 7 人の内訳は、成人が 3 人（42.9%）、前期高齢者が 2 人（28.6%）、後期高齢者が 2 人（28.6%）となっています。